

阿川佐和子さん

[エッセイスト]

エッセイストをはじめ、ニュース番組のキャスターや雑誌のインタビュアーなど、多方面でご活躍中の阿川佐和子さん。今回のインタビューでは、ご自身の子ども時代の出来事を中心に語っていただきました。



うれしかった、先生の力強い握手

「転校していく子はいい子、転校してくる子は悪い子というイメージがある。だから転校生がいじめられるのは仕方がない」。これは、コラムニストのえのきどりちろうさんの言葉です。実は私も、新宿区の区立小学校に転校した小学4年生のとき、同じような立場になり、苦しみました。

そんなとき、心の支えになったのが担任の近藤福次郎先生でした。今思えば、クラスをまとめる作戦でもあったのでしょうか。先生は二つのことをクラスの日課にされていました。一つは、下校する前に、先生と「さようなら」の握手をすること。心細い毎日を送っていた私は、一日の最後に、先生が握手した手を力強く握り返してくれるのが、「大丈夫、お前のことは見ているぞ」と言われているようで、とてもうれしかったのを覚えています。

見ていてくれる人がいる安心感

もう一つの日課は、日記を書いて提出すること。うれしかったことや悲しかったことなど、その日あった出来事を書いて出すと、先生が赤ペンで返事を書いてくださいます。

ある時私は、自分の背が低いのがコンプレックスだと日記に書きました。それに対する先生のコメントは「イタリアという国では、ちっちゃな女の子がものすごくもてるらしい。だから、キミは卒業したらイタリアに行け」というもの(笑)。「へえ、そうかあ」と

思ったのを覚えています。

また、ある子と掃除当番のことで口げんかになって「私も言い過ぎた」と書いた時には、「〇〇くんも日記に反省していると書いていたよ」と教えてくださいました。こうして、日記を通して仲直りできたり、他の子たちにそんなに嫌われていないことがわかり、ほっとしたりすることもありました。

転校生がクラスの子とはうまくいっていないのに先生とは親しい、となると、さらに摩擦が起きます。これを気にして、先生とは距離を置くようにしていましたが、遠くにいてもちゃんと見ていてくれる、信じられる人がいるのは、当時の私にはとても大きなことでした。

一人ひとりの長所を引き出す

中学・高校はキリスト教系の女子校に進んだのですが、10年ほど前に母校の幼稚園の入園案内ビデオのナレーションの仕事に依頼されました。このビデオに収録された、園長先生から父兄へのメッセージには感激しましたね。「親は周りと比べて、うちの子はまだ何々ができないと比較しがちですが、神様は、子どもに何歳で何をできなければいけない、覚えなければいけないとお望みになっていません。その子、その子の納得するタイミングで、新しいものを発見し、できるようになっていきます。」

これは幼稚園児だけでなく、大人にも通じることです。

最近は時代の流れが速くなり、人間

の評価も、ものすごく短期間で行われるようになってしまいました。芽が出る前に評価を出してしまう。そのため、精神的に焦り、不安になる人も多くいます。

もし、あと少しだけでも長い目で見てくれる人がいたら、どんなに救われるのでしょうか。

学校でも、子どもを数字や成績だけで画一的に判断しがちです。でも、かけっこが速い、人を笑わせるのが上手など、人にはそれぞれ得意分野があります。そこで、先生が「あいつはずいぞ」と言えば、みんなが目を向けるようになるでしょう。

逆に「ダメだ」と言ってしまえば、みんながダメだと思ってしまいますよね？先生方にはリーダーとして、子ども一人ひとりのよいところを生かせるような場面を作ってあげてほしいと思います。

先生も人間なのだから、オールマイティでなくてもいいんです。できる人もいれば、ちょっと落ちこぼれのような、子どもの目からもダメな大人に見える先生もいるでしょう。でも、そんな人の中にも、不思議と子どもに人気のある先生はいます。それは、その先生に、何か人間的な魅力があるから。

それと、「この先生にはかなわない」と思うものが何かひとつあれば、子どもたちは興味の有無に関係なく、尊敬するんですって。子どもに迎合するのではなく、“何か”を持っていれば、結果的に好かれ、尊敬されるのだと思います。

PROFILE

あがわ・さわこ ●1953年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部西洋史学科卒業。1981年秋のテレビ番組の海外レポーターをきっかけに、ニュースキャスター等を務めることに。現在テレビ朝日『たけしのTVタックル』ほかにレギュラー出演中。著書はエッセイ集、小説など多数。文藝春秋『週刊文春』で対談を連載するなど、多方面で活躍されている。

一人でも味方がいるとわかれば、
子どもは救われます